



「介護が必要な高齢者も
笑顔で暮らせる居場所」を目指し
「ないなら作る」と自宅を改築
以来 28年、様々な輪が広がる

なでしこ力

Power of Nadeshiko

30 年前、同居する姑の老人性うつ病の発症をきっかけに「介護が必要な高齢者も笑顔で過ごせる場所」を探し求めた吉川さん。当時、共住する瑞穂区には、今でいう「デイサービス」が無かった。「ないなら作ろう」と自宅を改築し一階に『宅老所えんがわ』を作った。この自宅一階の 28 年を振り返った。

1997 年、瑞穂区の自宅を改築し 1 階に開設した約 100㎡のスペースに『宅老所えんがわ』（以下・えんがわ）をボランティア活動で開設。いわゆるミニデイサービスで、介護の必要な高齢者が自宅にいるように楽しい一日が過ごせる居場所にした。

『えんがわ』の活動は徐々に拡大。『第 2 えんがわ』を作ろうと、雁道商店街で『いきいきサロン 雁ぶらサロン』も開設。商店街活性化にも挑戦し、ネットワークを広げていった。

『えんがわ』では現在、認知症カフェ『えんがわカフェ』、書道教室、生け花教室、囲碁同好会、麻雀同好会が定期的に行われ、毎日のように人が集う。これまでも、たまり場えんがわ、工房えんがわ、おもちゃ図書館、パソコン教室、カラオケ同好会も開催され、いずれも多くのボランティアが支えてきた。

昨年 2 月、吉川さんは、膝を悪くして自転車でしか行けない『雁ぶらサロン』を閉鎖。しかし『いきいきサロン』『雁ぶらサロン』は、利用者の要望で月 1 回、『えんがわ』で開催している。また、『宅老所えんがわ』は、ボランティアの高齢化により維持できなくなったが、平成 27 年より『認知症カフェ』『えんがわカフェ』に移行して運営している。

認知症カフェとは、認知症予防を軸に、認知症本人、家族、地域の人々が集い、楽しい時間を過ごす場。参加費 300 円で、お茶を飲みながら、おしゃべり、歌、脳トレなどを楽しんでいる。瑞穂区内の認知症カフェで毎週開催は『えんがわカフェ』だけで、利用者も 15 ～ 20 人と多い。



平成 27 年より認知症カフェ『えんがわカフェ』を運営

◇ ◇
吉川さんは、1978 年（昭和 53 年）に結婚。2 世帯同居で 3 人の息子を育てたものの、離婚準備のための勉強会などにも参加していた。しかし 1995 年に同居の姑が老人性うつ病を発症。妄想が激しく、情緒不安定になり、家族も混乱しながら介護生活が始まった。同年、姑がショートステイできる施設を天白区で探し、一方で北京女性会議に夫の承諾を得て参加。同会議には、世界中の女性が集まり、デモやワークショップが行われ、女性の貧困や、窮状を目の当たりにした。帰国後、「このままではいけない」と、ショートステイを受け入れてもらった施設のデイサービスを利用し始めたが、姑が「遠いからもう行きたくない」と拒否するようになった。

吉川さんは「姑にもっと優しくしなくては」と自己嫌悪に陥り体調を崩した。瑞穂区のデイサービスを探したが、姑が行ける所が少なかった。「そうした施設は土地が無いから作れない」と役所や議員から聞き、「それなら自宅で作ろう」と決心、宅老所づくりの活動を始めた。